

【礼拝賛美】「神の国と神の義を」
神の國と神の義を まざ求めなさい
そうすれば みな与えられる
ハレル ハレルヤ

【「よいよアドベント（待降節）】

一年で一番日が短い季節を迎えていま
す。朝は6時になつても夜は明けず、夕方
は5時になれば真っ暗です。

闇の時間が長いのは自然界だけではあ
りません。

世界を見渡すと、戦争や紛争、心を痛め
る暗い事件が目に付きます。まさに暗闇
に覆われた世界です。

しかし、そんな暗闇に覆われた世界に
救い主イエス様がお生まれくださったこ
とを聖書は伝えています。イエス様誕生
の箇所を読むと、「夜」の場面に多く出く
わします。ヨセフは夜眠っていたときに
夢の中で御使いのお告げを聞きました。
羊飼いは夜警をしていた時に御使いの知
らせを受けました。博士たちは夜空に輝
く星に導かれて救い主に辿り着きました。
これらは、救い主が闇に覆われた世界に

お生まれになつたことを示しています。
私たちは時に思います。神がいるなら、
どうして暗いことばかり起つてるのか、と。
しかし、少し視点を変えると違う景色
が見えてきます。

この闇を生み出しているのは人間です。
欲と欲とがぶつかり合つて争いが生まれ、
誰かが誰かを虐げて人は傷つき、そのよ
うにして人の世には苦しみが生まれます。
神は、そんな人間を見放さず、見捨てず、
愛してくださいました。だから神の御子
を遣わして暗闇に覆われた世界に干渉し、
私たちに近づき、寄り添つてくださいま
した。それがクリスマスです。

このことを認めて、イエス様を受け入
れるときに私たちの視点は変わります。
暗闇に覆われた状況は変わりません。
けれども、暗闇に呑み込まれない真の光
を受け入れる時、私たちの心には闇の力
に屈しない神の命が注がれます。その命
に生かされて希望をもつて進むのです。



「群衆を見て深くあわれまれた。彼らが羊飼いのいない羊の群れのよう」、「弱り果てて倒れていたから」である。(マタイの福音書九章三六節)

今朝はマタイ福音書九章の終わりの部分
から「キリストの心の痛み」と題して、私
の心に深く刻まれたることは「深くあわれ
まれた」の部分を中心にお取次ぎします。
私自身が「キリストの心の痛み」を知ること
によって、如何に応答すべきかを問われ
てきたからです。

まずはじめに「群衆を見て」。この「見

て」、ヘブル語法では『よく（確かに、実際
に）見る』と知りました。イエス様の御目

は前節三五節を読むと、一人一人に接して
「羊飼いのいない羊の群れが靈的飢餓にあ
るのを見て「深くあわれまれた」のでし
た。この情景を見ていて私に対する神の深
いあわれみの感情に驚くばかりです。

次に「群衆を見て深くあわれまれた」。あ
われみについてはかつて話しましたが、あ
われみを表わすヘブル語「ラハミーム」と
いう言葉を知りました。「ラハミーム」は
「胎」を表わすヘブル語の「ヘム」から派
生したものと考えられるとおり、「母の胎が
ら出したわが子への切つても切れない愛と思
いやりの感情」と教わりました。

「まさに神のあわれみは、神の愛の無限
の偉大さの結果（現われ）である」と。
神のあわれみを讃美七八篇三八節に見ま
す。逆らい続ける神の民でしたが、「あわれ
みの神は彼らを赦して滅ぼさず…」。この節
の注釈に「神は忍耐とあわれみのうちに、
民の悔い改めるのを待つておられる」とあ

りました。これは、神の「聖・義・愛」の
性質にあります。聖と義の神は不義の赦
罪は出来ず、愛は赦罪しようとします。そ
こに神が御子をこの世に遣わされて、十字
架の贖いの代価によって赦しを可能にされ
たのです。

三六節の「あわれみ」の意味は、「ばらわ
た」です。「他者の苦しみを、まさに自らの
はらわたが引きちぎられるかのような痛み
として受けとる」と教わりました。イエス
様が目にされた群衆を見て、そのように受け
留められたとは驚きであり、私自身への
思いと受け取ります。神のあわれみの中に
生かされている幸いです。

イエス様は「祈りなさい」と言われまし
た。祈りの空極は、ラハミームの神との合
一の経験としての理解から祈りの要請に答
えます。（英）

